共に考える住宅デザイン

○65○

自分が得する街づくり

身の周りの見直しを

甲斐　徹郎

下の写真は、私の家の近くで撮影したものです。直射日光にさらされた右の住宅は、コンクリートの建物自体が熱の固まりとなっています。一方、左側の屋敷は、緑に覆われ、その樹木が冷気を生成しています。細い道を挟んでいるだけですが、明らかにそれぞれの住宅を取り囲む微気候は違っています。

イラスト（A）で示すとおり、左の敷地からは多くの樹木による冷気のにじみ出しが期待できますが、残念ながら、その涼しい空気は、直射日光が当たり高温となった道路によって阻まれ、右の家の窓をいくら開けても入ってくることはありません。

あなたが右の家の住人で、まだ家を建てる前のプランづくりの段階だとしたら、涼しく暮らすための工夫としてどんなことを考えますか？　有効な工夫は、イラスト（B）のように、建物の位置を五十㌢ほど後退させ、左の敷地の緑とつながるように樹木を植えることです。そうすれば、左の敷地で生成された冷気は、右の敷地に流れ込み、窓を開ければ、その涼しい空気の恩恵を受けることができます。

昨今、「環境問題」に対する社会的認識が高まってきていますが、どうも自分たちの身近な問題としてとらえられていないようにに思います。私は、「環境」を社会的な問題として難しくとらえるのではなく、単純に、イラスト（B）のように、自分たちが具体的に得をするための手段として活用する対象ととらえるといいと思っています。

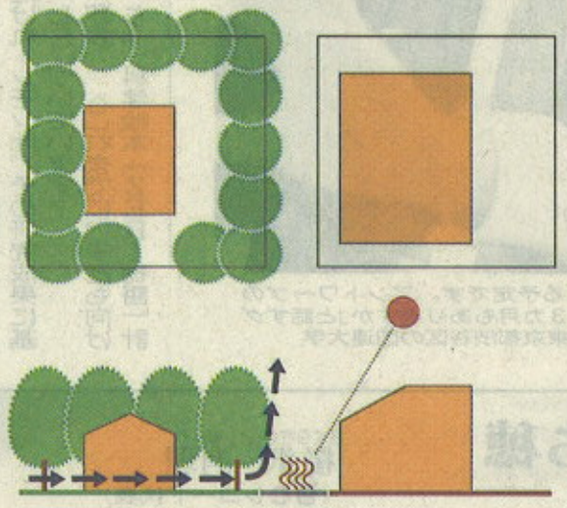
多くの人が、自分の家を建てるとき、外の環境と自分の家とのつながりを考えずに、室内環境を人工的にコントロールしようとします。その結果、自分の建てた家の存在自体が、自分の住む街の環境を不快な状況にしているというジレンマに陥っています。結果として、住まいの中でのクーラーの依存度が増し、クーラーの使用が自分たちの体調を狂わせるまでになっています。

このように、自分にとって損な状況よりも、得することを望むのは自然なことだと思います。自分が得をするために、自分の周りの環境を見直してみてはいかがでしょうか。そうした個々の住まいづくりが近隣の環境と連動し、さらにその先の環境と連動し、そしてさらに、といった具合に、連続していけば、街の環境が改善されるはずです。そして、ひいてはその街に住むあなたが得をすることになります。

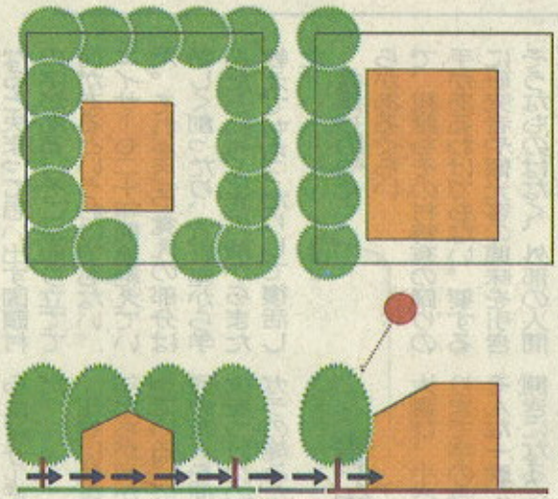
こうした手法は、行政の活動にも応用できると思います。市民に対して環境への配慮を説くよりも、こうした個人による「得」の追求の連鎖反応を促進させる方策が、行き詰まった都市環境を再生する原動力となるのではないかと思います。

（マーケティング・コンサルタント）

緑豊かな屋敷と隣り合うコンクリート住宅＝東京・世田谷



屋敷の緑がつくる涼風の恩恵を得られない状況（イラストA）



少し計画を改善することで、隣地の環境ポテンシャルを活用することが可能に（イラストB）

連鎖反応で都市環境再生